

「会う」探る親身に、柔軟に

入居者の生活の場「特別養護老人ホーム」でも、感染の拡大を恐れ、「面会制限」が徹底された。タブレットの画面を用いた面会も増えたが、高齢者にはハードルが高いなど課題も多い。入居者本位を実現させる方策は見いだせるのか？

「制限も限界」

面会制限のダメージは、入居者と家族とのふれあいを重視し、地域に開かれた場を目指してきた良心的な施設ほど大きい。

「あかねサクラ館」（茨城県北茨城市、定員50人。田園地帯で駅にも近い立地を生かし、「併設の」保育園児と交流し、近隣の人も気軽に立ち寄れるマナカライコ（街中護）をうたう。大半の入居者が認知症。看取りまでできる市内唯一の施設で、面会する家族らは毎月、230人ほどに上った。

「制限も限界」

8月、お盆の帰省を見据えて再び禁止した。事務長の石崎俊一さん（56）は同月、市内の病院で父を亡くした。面会制限のなかでの看病だった。入居者たちのことを思った。面会が減ったことで、入居者の気力や活力が衰え、認知機能や身体機能が目に見えて落ちたと感じる。本人にも家族にも、もうつらい思いはさせたくない。

医療の意思決定 コロナ禍と「面会制限」

昨年2月、厚生労働省の通達を受けて面会を全面禁止した。当時、市内（人口約4万2000人）で感染者はゼロだった。緊急事態宣言解除後の6月、10分間の面会を再開した。予約制。ボードで机を区切った面会室に入れるの



石崎さん（左）は、タブレットの画面を用いて家族と話す人のサポートも欠かせない。岩佐謙撮影

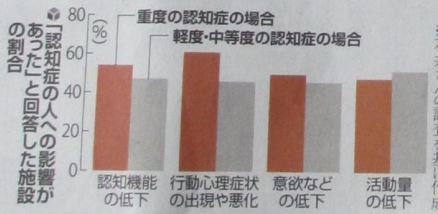
「制限も限界」

2月からタブレットを使う面会を始めたが、利用者は1週間に数人だ。入居者は体をうまく動かせず、カメラ越しに家族と目を合わせることが難しい。「見えてつか」と呼びかける家族も、満足はしていない。

「面会は入居者の『生きる力』を支えていた。家族に諦めがあるのか、面会者の数はピーク時の5分の1に減った。制限も限界が近い」と、石崎さんは話す。現在でも市内の感染者数は計46人（28日時点）と、県内で特に低い。

認知症悪化

面会制限やリハビリ・レク活動の時間短縮や中止などが影響し、認知症の悪化や身体機能の衰えが進むことは、石井伸弥・広島大学特任教授（老年医学）の調査でも裏付けられている。



看取り期の面会には家族も「フル装備」でのぞんだ（あかねサクラ館のスタッフによる再現）

「制限も限界」

昨年、全国945の医療・介護施設や介護支援専門員751人から寄せられた回答を分析した。認知機能の低下に影響があったと回答した施設の割合は、重度の人の場合で54%、軽度や中等度で47%に上るなど、心身への悪影響がみられた（図参照）。

認知症の人と家族の会（本部・京都市）の鈴木森夫・代表理事は、「1年半近く家族と会えていない人もいる。面会を生きがいにしてきた人もおり、本人も家族も元気を失っている。会えないまま終わるのではという不安の声も大きい。PCR検査を緩和の要件とするなど柔軟な対応がとれないのか」と言う。

心整える時間

特養の対応の柔軟性に感謝する声もある。東京都世田谷区の主婦、高見裕子さん（62）は、昨年12月、都内の特養で長く暮らした父（享年89歳）を看取った。1階ロビーで窓越しに声をかけるなどの方法で面会してきた。その父が1か月前に脱水症状になり、緊急入院した。面会禁止のまま容体が悪化

し、「積極的な治療をしないうのであれば」と、退院を求められた。療養型の病院に転院して、栄養補給などの治療を希望するか。特養に戻るか。家族の意見は、面会を諦めても治療する方向に傾きかけた。

最終的に特養を選んだのは、面会制限の条件を変えてくれたからだ。手袋、マスク、フェイスシールドなどを着用すれば、個室で父にふれることも、泊まり込むこともできる。「自然に衰えた父にとっては、家族に近い場所がよいのでは」との助言もあった。

父の穏やかさや息づかいを感じつつ、心の準備を整えた。父が好きだった渡哲也さんの歌「くちなしの花」を歌った。孫たちも顔を合わせた。会えなかった分を取り返すような濃密な時間が過ぎた。特養でなければこれほど親身に、本人中心の目線で接してもらえなかったと、高見さんは思う。

病院であれ施設であれ、問われるのは、患者や入居者本人にとって何が一番大事なのかを考え抜く理念と、それを患者側と共有する意思かもしれない。

（この連載は、編集委員・鈴木敦秋が担当しました）